

# 北水試 百年 こぼれ話

## ⑧北水試所属の小型調査船について

吉田 英雄

キーワード：北水試、小型調査船、磯舟、1トン以下、エピソード

今回は、北水試に所属していた磯舟クラスの調査船とそのエピソードについてご紹介します。

「北海道水産試験場五十年史」（中央水産試験場図書室に所蔵されている1950年頃作成と推定される手書きの原稿）によると、定地観測用の所属調査船が8隻あったと記載されています。

名前の付いた船は3隻のみですが、「川風号」と「かもめ丸」はいかにも水試らしい、また「北水丸」はそのものズバリのネーミングです（表1上）。

明治34（1901）年に始まった北海道における沿岸水温観測の事始めや歴史については、本こぼれ話シリーズの③（北水試だより79号、「高島水産調査所と高島ステーション」）や「北水試百周年記念誌（2001）」の「定地観測」に詳しく記載されていますが、昭和に入った1927年度から、北水試では沿岸水温観測点として、道内では杓形、紋

別、室蘭、道外では青森県深浦、新潟県佐渡の水津、石川県輪島の合計6カ所を増設しました。

定地観測所では、「観測を行う専任の人を雇って、沿岸水温観測のほかに毎日3回沖合観測点で各層観測も行う」ための船が必要でした。

しかし、定地観測用の調査船は、「沖合観測」の終了（輪島では1951年、水津1952年、紋別・杓形・室蘭1958年）に合わせて、定地観測所とともに廃止されたようです。残念ながら、これらの有名無名の船の写真は残されていません。

その後、北水試では、こうした沿岸での調査には、漁業者や漁協所属の漁船や指導船を用船して実施してきました。コスト面ばかりでなく、調査海域の状況に詳しい漁業者とともに、調査研究を進めることで、地元の理解と協力を得られるばかりでなく、調査研究ニーズの把握もできるというメリットが大きいこともその理由です。

表1 北水試所属の1トン以下の小型調査船の仕様

船名	所在地	登録番号	トン数	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
川風号	余市	HK5-23296	1.12	6.48	1.52	0.58	
※	余市	HK5-23293	1.47	7.06	1.56	0.69	
かもめ丸	稚内	HK5-23300	0.44	6.00	0.90	0.39	
※	紋別	HK5-23299	0.11	3.00	1.20	0.13	
※	室蘭	HK5-23298	0.46	6.30	0.97	0.32	
※	杓形	HK5-23297	0.31	4.90	1.03	0.32	
※	輪島(石川県)	IK5-4633	0.679	5.40	1.30	0.50	1951年観測終了
北水丸	水津(新潟県)	NG5-8077	0.79	5.50	1.23	0.59	1952年観測終了

注)資料は、北海道水産試験場五十年史より引用、※印:船名無し

船名	所在地	登録番号	トン数	測度長さ(m)	測度幅(m)	測度深さ(m)	備考
おやしお三世	余市	HK3-123182	0.50	5.33	1.54	0.4867	FRP(船外機30馬力)
おやしお丸	稚内	HK3-125603	0.3	3.80	1.81	0.40	ゴム(船外機30馬力)
第2 トコロカムイ号※	恵庭	HK6-1441	0.20	3.87	1.40	0.54	FRP(船外機9.9馬力)

注)平成以後に使用された小型調査船

※さけます内水試所属小型船(名の由来はアイヌ語名で沼を守る神様の意、命名は大沼漁協宮崎司組合長)

一方で、水産試験場内にも自前の小型船が欲しいという要望はあり、中央水産試験場（余市町）が平成5（1993）年に建て替えられた時に、FRPの船外機船が導入され（表1下）、中央水試所属の試験調査船おやしお丸（178トン）にあやかって、おやしおⅢ世と命名されました。使用に必要な、運搬用の台車の購入、台車を牽引するための公用車の改造などを行い、ヒラメの初期生活史調査などの他、水試前浜での「中央水試一般公開」時の人気イベントの「地引き網体験」にも使われてきました。

しかし、小型船舶操縦士免許取得や船体のメンテナンスなど経費面での組織的支援基盤の脆弱さから、使用頻度は低くなり、北海道大学忍路臨海実験所でより有効に活用してもらおうと2006年3月に譲渡されました（写真1）。

印象に残るエピソードとしては、1998年7月に開催された、余市町の第30回北海ソーラン祭りパレードで、台車に乗せたおやしおⅢ世を山車に改造して参加し、見事山車コンテストに優勝したことです（図1）。この当時は、休日に調査研究業務以外で公用車を使用することに関しての組織的なハードルが高く、行事への参加は理解してもらったものの、「黙認（組織的には無かったこと）」



写真1 北大忍路実験所内の国土地理院忍路験潮場前に係留されるおやしおⅢ世（2007年10月）

という形でした。運転手として参加した筆者は、パレードから無事帰還してほっとしたことが思い出です。

次に、稚内水産試験場で小型調査船として2006年1月に登録したゴムボートのお話をします。このゴムボートは、2010年1月末で用途廃止となった三代目のおやしお丸（178トン、中央水産試験場所属）建造時の装備品として購入されたもので、船名もそのものズバリ「おやしお丸」です（表1下）。

稚内水試では、北海道区水産研究所や北海道大学などと共に「トド出現実態・生態把握調査」を行っており、宗谷岬から北西約1km沖に見える通称「弁天島」という、冬場に多くのトドが上陸する周囲500m程度の岩礁で上陸数を把握する計画

広報

★ よいち

1998  
8  
No. 568

余市町のシンボル

木：りんご  
花：りんごの花  
鳥：かもめ  
魚：あゆ  
(平成7年1月1日制定)

第30回北海ソーラン祭り  
(7月18日・19日)  
盛大に開催される

写真は山車コンテスト優勝の道立中央水産試験場の「帰ってきたウルトラニシン号」

まちの人口  
(平成10年6月30日現在)

世帯数 9,828世帯  
人口 24,263人  
男 11,366人  
女 12,897人  
平成7年回勢調査人口 24,485人

**スピードの出し過ぎなど無謀運転の防止**  
「守ります自分の命と交通ルール」  
(交通安全宣言・沢町小学校6年1組)

図1 第30回北海ソーラン祭り山車コンテストで優勝した「帰ってきたウルトラニシン号（中央水試・畑中理容店チーム）」（広報よいち表紙）

を立てました。しかし、この地区では、冬場は沿岸が凍結してしまい、漁船は陸揚げされるため、自前で弁天島まで渡る手段として、おやしお丸のゴムボートを使うことにしました。

研究職員には小型船舶操船士の免許所持者がいなかったため、稚内水試所属試験調査船乗組員も参加し、地元の宗谷漁業協同組合の協力を得て実施しました。小型ゆえ、波や風に弱いという欠点があり、調査は天候に大きく左右されましたが、用船（漁船）が見つかるまでの2年間活躍してくれました（写真2）。現在は、稚内水試の漁具倉庫に置まれています。

なお、2010年に北水試と同じ道総研水産研究本部の一員となった、さけます・内水面水産試験場



写真2 ゴムボートのおやしお丸（トド調査で弁天島に上陸、2006年2月）



写真3 北海道南幌町親水公園の沼でオオクチバス駆除調査中（2004年9月）の第2トコロカムイ号（写真提供：さけます内水試）

（元道立水産孵化場）には、「第2トコロカムイ号」があり、現役で活躍中です（写真3）。

一般の皆さんは、公設研究機関である水産試験場には、魚を飼う水槽や調査に使う道具（船や潜水用具など）を当たり前にも備えているとお考えでしょう。我々研究を志す者も、贅沢な設備までは求めていませんが、同様に考えています。若い水産研究者が希望に燃えて、水産試験場に就職したら、何も無かったでは、研究意欲も下がってしまいます。

しかし、これらの設備は利益を得るための商売道具として使っているわけではありませぬので、研究予算が削減されると、これらを使いこなすことは、なかなか大変なことです。

地方の博物館や水族館の存続にも言えることで、携わる職員の経費削減努力や工夫は当然ですが、地域住民の皆さんや国民の理解が不可欠であるとともに、我が国の「国力」や「国民の文化度」が問われるところでもあります。

現在道内にある7つの水産試験場では、それぞれの水産試験場が、それぞれ本州の県に相当する規模の「管内」において、それぞれ専門の研究機能と設備を集約化して効率化を図っています。そして、必要不可欠な共通の設備と機能を持つことで、地域ごとの研究ニーズに的確に応える体制をとりながら、調査研究活動を行っています。

こうした調査研究の歴史の中で、有名無名の小型調査船が存在し、活躍してくれたことを、我々研究者は忘れてはならないでしょう。

（よしだひでお 稚内水試場長

報文番号B2354）